



拝みたおしても買ってもらわれん時代になつたてきたらしゃあないな」と思い、さすがの父も「弘行、やっぱりのオッサン言うように、お前も割り箸するか」と言い出しました。しかし、「同じ辞めるなら、ひと通りいろんなもん作っとくか」ということで、売る当てはないけれども、半ば職人の意地として作っていったんです」

そんな福西さんたちに転機が訪れる。昭和二三年秋、戦後間もない奈良県に駐屯していた進駐軍の司令長官ヘンダーソンがアメリカに引き上げる際に、当時の県知事だった野村万作に伴われて吉野の里にやってきたのだ。

「そしたら、六尺からある大きな外人さんが入ってきた。その人がヘンダーソン長官でした。そこで、そのとき辞めるつもりで作ってた草木染めの紙をここで見てもらいました。すると、どれもこれも見本に一枚ずつほしいと言うので持って帰らせたら、一週間たつたかない間に発注があつたんです。それで、もう辞めようと思つて作つてあつた紙をおかた送りました。正直言つて不安もありましたが、野村知事が「わしが責任もつから送つてあげてくれ」という言葉に従いました。そうすると、ひと月ほど経つて『福西さん、

県のほうにお金を送られてきました。それを持つてうちの知事室の室長に持って帰らせるから受け取つてやつてください」と知事さんから電話で連絡があつたんです。そのときは本当に嬉しかった。天の恵みかと思うほどに胸がいつぱいになりました。

一時は、下市で割り箸をやるうと思つていましたが、勧めに来た親戚の人にも直ぐに『オッサン俺やっぱり辞めるのやめるわ、紙するわ』と言いました(笑)。それでまた、日本人が先に目をつけてくれるのではなく、外国の方がうちの紙にぞつこんしてくれたと

いうことも非常に嬉しかったし、その後の励みになりました」

こんな出来事がなかつたら現在の自分ではなかつた、と福西さんは言い切る。その後、福西さんのつくる和紙は、もつとも優秀な日本の伝統文化のひとつとして世界に発信されることとなった。

「でも出来ることなら、和紙は日本の生活様式のなかでずっと大事に使ってもらえたら、それがいちばん嬉しいねんけどなあ、と思うのですが」

(次号に続きます)

